

『ぼたる』——ふたりの女優のために——

登場人物

ツチダアズミ（四九歳、独身で通してきたという女）

フジタヒトミ（五三歳、夫が失踪してしまったという女）

大阪府南部、和泉山脈麓の田舎町（ツダという架空の名を持つ）。

幹線道路から遠く離れた集落の片隅。

里道から、細い流れの川へと下ったところ。

川に添って一軒家。

打ち捨てられた廃屋に見えるが、生活しているものの体温が、確かにある

せせらぎ。

（ 1 ）

初夏。

夕暮れ時。

不機嫌そうな女（ヒトミ）がやってきた。

菓子箱の包みを持っている。

早速に、タモ網とバケツに目を留める。

水の流れを背にしてある戸口をノックする。

応答はない。

建物と川の間、やっと人ひとりが通れるほどの軒下を歩く。

この家を探っているのである。

もうひとりの女（アズミ）自転車を押して坂道を下ってきた。

ヒトミ、物音に気付き軒下から出てくる。

出くわした。

対峙するふたり。

アズミ ……だれ？

ヒトミ ……、

アズミ どなたですか？

ぎこちない間。

ヒトミ 逢魔が時、ちゆうんやねえ。

アズミ ……オウマガ、トキ？

ヒトミ 不吉なモノに出会う時間。妖怪、魑魅魍魎、

アズミ だれやて聞いてんねん。

ヒトミ だれやと思う？

アズミ 失礼なひとやね。

ヒトミ ツチダさんやんな。

アズミ そやけど、

ヒトミ こないだの大雨、大変やったやろ。ここらへん水に浸かったんとかやあうん。よお  
こんなとこに住めるなあ。

アズミ ほっというて。

ヒトミ なあ、いつになったら梅雨が明けんのやろなあ。

アズミ ……、

ヒトミ フジタです。

アズミ ……フジタ、

ヒトミ わかるわな。

アズミ わからん。

ヒトミ ま、ええわ。

アズミ オウマガトキかなんか知らんけども、ほんで出てきたつちゆうわけかいな。

ヒトミ 妖怪あつかいやな。

アズミ ナンカヨウカイ？ つて、アンタに用なんかないわ。

ヒトミ アンタにのうてもな、コッチにはあるねん。

アズミ ふん、金なら貸さへんで、

ヒトミ なにをまた、笑かしてくれるなあ。

アズミ こんなボロ家（ぼろや）でケチケチ暮らして、大金貯め込んでるちゆうウワサでも

聞いてきたんやろ。

ヒトミ おやおや、

アズミ ほななに？ はっきりしい。

ヒトミ こんなひとやとは思わなんだわ。

アズミ なにひとりごとゆうてんの。さっさと帰り。あんなとこに車停めて。あれアンタの  
やろ。ええ車乗ってるやん。フジタさん、はよ動かさな、通行のジャマになつて  
るで。

ヒトミ だれも通るかいなこんな径（みち）。

アズミ 車きたらどうすんの？

ヒトミ その時に動かす。

アズミ 手前勝手なひとやなあ。

ヒトミ 聞きたいことがあるんや。

アズミ はい、さっさとゆうてしもて。ほんでとつと帰って。

ヒトミ ケンカ腰やなあ。

アズミ アンタがケンカ売ってんのやろ。

ヒトミ まあ思い当たることがあるやろしな。

アズミ なにを？

ヒトミ とぼけやんといて。

アズミ とぼけるもなんも、アンタ知らんし。ひと違いしてへん？

ヒトミ (芝居じみている) たれそかれ。逢魔が時はな、黄昏時ともゆうんや。そこにいるのは誰、ワタシの目の前にいるのは、・・・夕暮れて薄暗うて、ようわからん。化け物やないやろか。

アズミ なにをひとりで芝居してんの。

ヒトミ そんなふうなゆうんや。

アズミ 学があるんやなあ、

ヒトミ なあ、こんなとこで立ちばなしもなんやし、

アズミ バケモノと妖怪が、

ヒトミ ちよっと家あがらしてよ。

アズミ ……

ヒトミ これ、

菓子の包み。

アズミ なにそれ？

ヒトミ あいさつ代わりです。

アズミ ちよっとなあ、アンタおかしいて、

ヒトミ いいにくいことやし、

アズミ ほなゆわんでええやん。

ヒトミ いいや、このまま帰られへん。

アズミ わけわからん。

ヒトミ はなしさしてほしいねん。

アズミ そやからなんのはなし？ もったいぶらんではよゆうて。

ヒトミ (急に弱気になったような) あれっ？もしかしてアンタ、・・・

少しの間。

アズミ なに？ どないしたん突然？・・・あれっ？あつ、あー、そうかあ、やっぱりひと  
違いや。おっかし思った。

ヒトミ アンタ、ツチダアズミさんやね。

アズミ ……、

ヒトミ 東保育所の下の、タカダ織物で、女工やってる、

アズミ そやけど、

ヒトミ ほなまちがいない。

アズミ なにイ？

ヒトミ うちの主人返して！

アズミ は？

ヒトミ いてるんやろ？

アズミ え？

ヒトミ そこに、その家のなかに、

アズミ なにをゆいだすんやこのひとは、

ヒトミ (家に向かって) おとうさあん！ワタシですう！

アズミ ちよっと、

ヒトミ おとうさあん！

アズミ やめて、

ヒトミ (聞く耳もたず) アナタっ、

アズミ ちよっとお、なにゆうてんねん、

ヒトミ ワタシが悪かったんやったら謝ります。

アズミ だれもいいひんて、

ヒトミ ヒトシさんっ、

アズミ やめて、

ヒトミ 隠れてんで、出てきて、

アズミ いるわけないやろ。

ヒトミ いてるっ、証拠がそこにあるっ！

タモ網とバケツを指した。

アズミ そんなもん、どこにでもあるやろ。

ヒトミ 主人のや。主人のものがなんでここにあるんや？

アズミ なんでアンタの主人のやてわかるんや。名前でも書いたあるんか。

ヒトミ ワタシはな、見たらわかるんや。

アズミ なアホな。

ヒトミ ほなうちから盗んだんか。それやったら警察にゆわな。

アズミ 待ってえや、これはな、ここ(川の傍)にほったあつたんや。だれかが魚でも捕りにきて、そのまま置いて帰ったんや。アンタとこのやつたらさつきと持つて帰つて。

ヒトミ とぼけて、

アズミ とぼける必要なんかあらへん。

ヒトミ ヒトシさあん、

アズミ ここにはおれへんし、な、ヒトシさんここにはいてへんから、

ヒトミ 家の中に隠れてるっ、

アズミ (ギョッとする)

ヒトミ (戸口を叩いて) なあ、出てきて、ヒトシさん、

アズミ 冷静になる、な、

ヒトミ うるさいっ！

ヒトミ、きびすを返して家から離れてゆく。

アズミ えっ？

ヒトミ 車でその家突っ込んだる。

アズミ ちょっとお、やめて、やめてえ、

アズミ、ヒトミを追い、捕らえた。

アズミ アンタ、

ヒトミ 放して、

アズミ 冷静に、な、

ヒトミ ヒトシさん、出てきてえ、いるんやろ、

アズミ いるわけない、フジタさん、アンタ、冷静になる、なっ、・・・アンタ、酒臭いな。

ヒトミ うるさい、放せっ、

ヒトミ、アズミをはねのけた。

アズミ あいたっ、

ヒトミ、玄関の戸を無理に開けようとする。

ガタピシ音をたてるが開きはしない。

ヒトミ もおっ！

ヒトミ、車の方へ走る。

アズミ あかんで、やめて、

ヒトミを捕らえた。

ふたり取っ組み合いながら坂道を転げた。  
荒い息のふたり。

アズミ いてへんよだれも、・・・

ヒトミ、しゃがみこんだまま。

ヒトミ (泣いている)

アズミ だあれもいいひん。ワタシひとり。ずうっとひとり。

ヒトミ ……、

しばらくの間。

アズミ 暗なっしてしもた。

菓子の包みを拾い上げて、

アズミ 食べ物をこんなことして、

ヒトミ ……取っついて。持ってきたんやさかいに。

アズミ もらういわれがない。

ヒトミ あのひとの好きなもんやさかい。

アズミ ムカシンのまんじゅう、

ヒトミ あの人の好物やさかい。

アズミ あのな、まずその勘違いをなんとかしよう。誤解やねんな。

ヒトミ 誤解、

アズミ タマ(タモ網のこと)とバケツはアンタのご主人のもんか知らんけど、

ヒトミ 聞いた、うちの主人がアンタと浮気してるて。

アズミ うわ、なんでやねん。ウソ八百、

ヒトミ ウソゆうような人やない。

アズミ だれがゆうた？

ヒトミ それは、・・・ゆわれへん。

アズミ ワタシの知っているひとか？

ヒトミ 知ってるか知らんかは知らん。

アズミ アンタのダンナとワタシが？ なに見たちゆうねん、

ヒトミ この川のそばで会ってた。

アズミ ここはワタシのうちやで。

ヒトミ 家へ連れ込んだて、

アズミ ワタシがかい、

ヒトミ、うちの主人、そっちの方（軒下の、つまり家に沿った奥の方）に入って行ったて、アズミ たまたま魚かなんか追うて、川に沿うてそっちの方に行っただけとちやあうんか。まぎらわしい。

ヒトミ 浮気してたんや。

アズミ そやからそれはワタシやない。そら、たまにはひとはくるよ、遊びにな、川やさかい。ワタシ、アンタとこのダンナ知らんし、いちいち覚えてないわ。それに、そなたまには、ここにきたひととハナシくらいすることもあるよ。ハナシただけで浮気て、

ヒトミ そんできてみたら、

と、タモ網とバケツを指す。

アズミ そやからそれは、

ヒトミ うちからタマもバケツもなくなってるし、そこにあるし、

アズミ 何べんゆうたらわかるねん。

ヒトミ ここに主人がきて、アンタと仲良うしゃべってた。そこに主人のタマとバケツがある。

アズミ ああ、ほんでうちに隠れてるってか、

ヒトミ （うなづいた）

アズミ わかった。まあ、・・・まあ、玄関までやけど、入って、だれもいいひんから。玄関までやで。覗いたらええわ。もしだれかが隠れてるんやったら、ワタシの方がびっくり仰天やわ。

間。

ヒトミ もおええ、わかった、

アズミ なにが？

ヒトミ もうええ。

アズミ なんで？ 見せちやるゆうてんのや。

ヒトミ してるんやったらアンタが入りゆうはずがない。  
アズミ そうや、いてへんよ、だあれも。

間。

アズミ だんなさん帰ってけえへんの？

ヒトミ ……、

アズミ いつから？

ヒトミ ……、

アズミ いつごろから？

ヒトミ いつごろ？

アズミ もう長い間になるん？

ヒトミ ほっというて。

アズミ ほな、はよ帰って。ワタシ晩ごはんまだなんやわ。

ヒトミ 帰るわ、

アズミ そおか。

ヒトミ どうもお騒がせしました。

アズミ もうこんというてよ。

ヒトミ、ふと立ち止まって、

ヒトミ 聞きたいことあるくせに。

アズミ えっ？

ヒトミ 聞きたいんやろ。わかってるって。

アズミ ……、

ヒトミ まんじゅう食べというて。

アズミ こんなもん、もらわれへんて。

ヒトミ 晩ごはんまだなんやろ。

アズミ あほ、晩ごはんにこんなもん、

ヒトミ 食べへんのやったら捨てというて、

アズミ アンタなあ、

ヒトミ またくるし。

アズミ こんというて。って、忘れもん、

ヒトミ 捨てというて、って。

アズミ ちやう。タマにバケツ、

ヒトミ ……ええわ、置いとくわ。



アズミ　なんで？

ヒトミ　あずかつといて、

アズミ　いやよ、持って帰って、

ヒトミ、無視して歩きだしている。

ヒトミ　真っ暗やなあ。街燈もついてへんの？物騒やわあ。

去った。

佇むアズミ。

虫の声。

少し離れたところで、車のドアの開まる音、そしてエンジン音。

音楽1。

溶暗。

(2)

音楽1、消えてゆくと同時に明転。

翌日。

昨日と同時刻。

同じ場所。

ヒトミ立っている。手には懐中電灯。

アズミ、自転車を押して帰ってきた。

ヒトミの姿を目にしたアズミ、ビクツとして、

アズミ　なに、なんでここにおるん？もうこんといててゆうたやろ、

ヒトミ　おかえりなさい。

アズミ　て、どうゆうこと。

ヒトミ　まだ終わってないやん。

アズミ　始まりもないのに終わる必要もない。

ヒトミ　だれがアンタとうちの主人のことをワタシにゆうたか、

アズミ　もおええ。

ヒトミ　聞きたないん？

アズミ　どうでもええわそんなこと。

ヒトミ　ほな、なんか思い出してくれた？

アズミ　またおかしなことゆう。帰って、

ヒトミ　まんじゅう美味しかった？

アズミ アンタ、フジタさん、アンタどこのひと？

ヒトミ オクボや。

アズミ オクボ、そう、オクボのフジタさん、ええ車乗ってはるけど、ご主人、なにやって  
はんの？ サラリーマン？

ヒトミ 織物や、タオル、

アズミ ほなフジタタオル、

ヒトミ そや。

アズミ 知らんかった、

ヒトミ 知らんかったん。浮気相手のことを、

アズミ 冗談はやめて、

ヒトミ 出会い系とかゆうやつ、名前も素性もヒミツにして、

アズミ そんなもん興味ない。

ヒトミ けど今、白状したわな。ちやう？ 相手のオトコはフジタタオルの社長やって知ら  
んかった、てゆうことやんな。うちの主人と浮気してたて、そういうことやんな。

アズミ なんでもお、浮気浮気て、ちよっとハナシただけやろ。

ヒトミ やっぱり。

アズミ ワタシはな、独身やで。

ヒトミ そらカンケイない。

アズミ ああ、思い出したわ、たぶんあのひとや、そうや、そのバケツとタマ持ってたな、こ  
の川でサカナ捕ってたよ。ハナシした。そんだけ。そやかてここワタシのうちやで。  
だれかきたらハナシするやろ。せなしやあないやろ。そんな時のことを、だれかが見  
たんやろな。そやな、織物関係のもんやったらフジタタオルの社長の顔、知ってる  
わな。このへん繊維関係多いしな。そやけどワタシは知らんかった。興味ないしな。  
ただオトコの人とハナシしたちゆうだけやわ。それを、・・・なんて浮気やねん。  
おそろしわ。ほんでなに、社長さん、家出したん、オンナつくって？ なんてワタ  
シ？ ワタシみたいなもの。もっと若い、そこらのスナックの、ええ匂いのおネエ  
チャンちやあうん？ あほらし。

間。

アズミ ・・・ちやう、

ヒトミ えっ？

アズミ ちやあうわ、・・・あのひとはそんなひととちやあうかったわ。

ヒトミ あのひと、

アズミ アンタの、・・・だんなさんかどうか知らんけど、

ヒトミ そんなひととちやあう？

アズミ 誠実そうなやさしいひとやった。

ヒトミ アハハハハハ、誠実、そうな、やさしい、ひと、やて、

アズミ なに笑うんよ、ワタシにはそう見えた。

ヒトミ う、

アズミ なに、

ヒトミ、声を殺して震えている。

アズミ 泣いてんの？

ヒトミ . . .、

アズミ よお泣くな。

ヒトミ そやかて、. . .

アズミ わかったやろ、わかってくれたか、ワタシはアンタのご主人の、その、アレとは無関係や。

ヒトミ 教えてえな。

アズミ なにを？

ヒトミ 主人と、どんなことしゃべったんか、

アズミ どんなことで、そんなん、意識もなんもしてへんしな、覚えてるかいな。

ヒトミ そう . . .、

アズミ えーっとな、ここらではまだホテルは飛ぶんか、て、聞かはつてな、そやから、まだ飛んでへんで、ゆうたらな、まだ飛んでへんゆうことは、これから飛ぶんか、て、びっくりしはつてな、ほんで、毎年飛ぶんか、去年も飛んだんか、何月や、七月のいつごろや、ゆうて、十日ごろや、ゆうて、

ヒトミ だれが？

アズミ ワタシが。七月や、七月の十日ごろやゆうて。ほたら貝いるやろ、ゆうて、

ヒトミ カイイル？

アズミ 貝や。こんな細長い貝や、ゆうて、キュっところ指を . . .。ああ、見たことある、いるで、ゆうて、ワタシが。それがホテルのエサになる貝で、カワニナゆうねん。川にな、カワニナがおるねん、ゆうて。

ヒトミ だれが？

アズミ あんたのご主人が、

ヒトミ . . .、

アズミ 川にな、カワニナがおるねん、ゆうて、

ヒトミ . . .、

アズミ 川にな、

ヒトミ もおええ、

アズミ 上（かみ）の染屋がつぶれたさかいに、水がきれいになったんやろゆうて、その貝が  
いいひんようになるよとまた、ホタルもいいひんようになるゆうて、そやから、川、  
汚したらあかんで、ゆうて、ご主人が、

ヒトミ アンタ大ウソつきや。

アズミ え、・・・なんで、

ヒトミ 覚えてるかいな、て、よお覚えてる。

アズミ ほんまや、・・・いや、ひとつ思い出したらそれがきつかけになって、な、そうい  
うもんやろ。昨日はアンタがわけの分からんややこしいことゆうたさかいに。ほん  
で川をのぞき込んで探してるみたいやったけど、そやけどその日は貝が見つからへ  
んらしゆうて。いるときはいっぱいいるんやけどなあ。大雨で流されたんかなあ、  
て、ワタシ。あの豪雨で。それからその網でハヤを何匹かすくうてバケツに入れて、  
じっと見てて、これ食えるやろか、てワタシに聞くさかい、食べたことあるで、ゆ  
うて、

ヒトミ 食べるん？

アズミ あんまし美味しくないけどな。ほな食わんか？ てゆわれてもな、ワタシいらんわ、  
ゆうたら、そやな、いくらでも欲しい時に捕れるわな、生け簀みたいなもんや、え  
えなあ、ハハハて。それでそのサカナは、また川に戻してやって。ホタルが飛ぶ頃  
になったらまたここにくるわ、ゆうて、サヨナラあ、て、

ヒトミ ホタルの飛ぶ頃、七月の、十日ごろ、あの人は、ここに、やって、くる・・・、

なんとも形容しがたい、意味ありげな、間。

ヒトミ ええこと聞かしてもらたわ、おおきに。

アズミ なあ、

ヒトミ 帰るわ。

アズミ なにがあったん？

ヒトミ なにがて、やっぱり浮気しとったんや。

アズミ まだゆうか。

ヒトミ 違うない。

アズミ いつから帰ってきてないん？

ヒトミ もうだいぶになるかなあ。

アズミ 心当たりとか、

ヒトミ アンタやったんやけどなあ、

アズミ やめて。アンタ、フジタさん、アンタ、シアワセな人やなあ。アンタご主人が家出  
したの、自分になんか原因があったんやないかとかは、考えへんの？ 思い当たる  
こととかないん？

ヒトミ 全然。

アズミ シレっとようゆうな。ワタシにゆわいたらまあ、アンタにモンダイあるわなあ、昨日のことが証明してるわ。

ヒトミ 夫婦やったらどっちもどっち、おたがいさまよ。

アズミ おたがいさまでゆうコトバ、きらいやわ。

ヒトミ あ、そう。

アズミ この世界は決しておたがいさまになんかできてない。

ヒトミ なにい、差別、する側とされる側？ 労働力、搾取、する側と、される側。愛、する側と、なんやろ、あ、される側か、

アズミ 警察に捜索願とか、出さへんの？

ヒトミ 警察、・・・警察なあ。家出やる。ワタシの恥になることやし。夫に逃げられたオナになってしもた。だれかに殺されてどっかの山奥に捨てられたっちゆうわけでもないし、なあ、そのだれかがワタシやったらアンタとこに怒鳴りこめ へんわなあ。まあ、大げさにしたくないよ。子どもにも知られたくないしなあ。

アズミ そう、

ヒトミ もう独立して東京とシアトルにおるんやけどな。

アズミ シアトルで、

ヒトミ 留学。

アズミ さすが社長の息子さんやわ。

ヒトミ 娘や。

アズミ ふうん。

ヒトミ 息子は東京で病院に勤めとる。

アズミ そらまた、

ヒトミ 帰るわ。七月の十日頃にまた来ます。

アズミ ・・・うん、

ヒトミ うちのひと見かけたら電話ちょうだい。フジタオールの電話番号は、わかるわな。

アズミ あのなら、

ヒトミ ・・・、

アズミ ええわ、わかった。

ヒトミ 暗なる思て、

と、懐中電灯を点けた。

アズミ 用意のええこと。

ヒトミ、去る。

佇むアズミ。

カエルや虫たちの鳴き声。

しばらくの間をおいて、車のドアの閉まる音、そしてエンジン音。

アズミ、放心したかのようなようすで家の中へ。

奥まった一箇所を無意識に意識しながら、

アズミ　そうや、ワタシ大ウソつきや。

音楽 2。

溶暗。

( 3 )

音楽 2、消えてゆくと同時に明転。

数日後。

夜。

アズミの家に灯り。

懐中電灯の光がやってきた。

ヒトミだ。

清酒の四合瓶を持っている。

戸を叩きながら、

ヒトミ　ツチダさーん、おるう？　・・・アズミちやあん、・・・、

沈黙。

再び、戸を叩いて、

ヒトミ　ツチダさーん、ツチダさーん、なんや、居留守つこてんのかあ？　いるんや  
ろ？　電気点いてるやん、なに？　おトイレ入ってんのん？

アズミ、チェーンロックされている戸を少し開けて、

アズミ　アンタうるさいな。

ヒトミ　夜遅うゴメンなさい。

アズミ　なに、

ヒトミ　ええ天気やなあ。

アズミ　ああ、今日は一日ええ天気やったな。それがどないしたん。

ヒトミ 七夕で、いつつも雨降ってると思えへん？

アズミ そらきつとどっかの片思いしてるオンナが嫉妬して、

ヒトミ 雨降らすんか。

アズミ 織姫と彦星を会わしたないんやろ。

ヒトミ いじわるか。

アズミ いじわるでも、いじらしいやん、涙雨や。

ヒトミ 演歌にありそうなあ。今月今夜のこの月を、ボクの涙で曇らせてみせる。これはちよつとちやあうか。

アズミ なにゆうてんの。

ヒトミ ほな今晚はデートやな。

アズミ 知らんがなそんなこと。

ヒトミ なあ、ちよつと入れてえな。

アズミ なんで？

ヒトミ なんて、ハナシがあるんやし。

アズミ コツチャにはないわ。

ヒトミ そんなことゆわんと、

アズミ アンタと関わったらロクなことない。

ヒトミ アンタのこと聞いたんや。

アズミ え？

ヒトミ アンタの、

アズミ ワタシの？

ヒトミ アンタずっと独身やてなあ。

アズミ ほつといて。

ヒトミ お父さんと住んでたんやろ、この家。

アズミ ええかげんにしちよう。

戸が閉まった。

ヒトミ なあ、ちよつと入れてえや。

アズミ ……、

ヒトミ なあ…、

アズミ あのなら、アンタは知らんやろけどな、うちはな、他人は玄関先までしか入れへん  
のや。

ヒトミ そやてな、それも聞いた聞いた。ぜったい家の中に入れてくれへんのやて。入りか  
けて怒鳴られたひと、おるみたいやな。都市伝説みたいになってるで。あつ、ちや  
うちやう、オダニの山奥やから、都市伝説やのうて、秘境伝説。

アズミ 秘境で、  
ヒトミ 山姥（やまんば）でも隠れてそやなあ。  
アズミ やめて、  
ヒトミ なあ、なんでだれも入れられへんの。なんか床下にぎょうさんお金隠しちやあるらし  
いあん。お宝伝説か。  
アズミ 隠さなあかんほどお金あったらこんなとこで住んでへんわ。  
ヒトミ そらそやわな。  
アズミ ほっといて。だれも入れたないんやさかい。それだけや。  
ヒトミ そやけどこの前、入りゆうてくれたやん、ワタシに、なあ、  
アズミ あれは、アンタが、  
ヒトミ なに、

少しの間。

ヒトミ 可哀そうやったから、とかゆわんでよ。  
アズミ 玄関までや、てゆうたやろ。  
ヒトミ あ、そやったん。  
アズミ ゆうたはずや。  
ヒトミ わかったわかった。ほんで、男嫌いやて？  
アズミ は？  
ヒトミ あ、そうでもないん？  
アズミ アンタ、ワタシのこと探偵みたいに調べて回ったんか？  
ヒトミ この前はまんじゅうでゴメンやで。酒の方がええんやつてなあ。今日はお酒持って  
きたし、  
アズミ 気イっこうでもらわんでも結構。  
ヒトミ いや、一緒に呑も思て。  
アズミ ワタシなあ他人（ひと）と、こう、楽しゅう呑むつちゆうのんはできひんねん。  
ヒトミ ふうん、  
アズミ もう帰って。  
ヒトミ お父さん、亡くなってだいぶ経つん？  
アズミ そやな。  
ヒトミ あれ？ ホンマに亡くなったん？  
アズミ もおっ、  
ヒトミ あ、やっぱり、お父さんのこと聞いたら怒る。  
アズミ そんなウワサ聞いてきたんか。  
ヒトミ なんかややくしみたいで。



アズミ いややねん。

ヒトミ お父さん消えてしもたんやて？

アズミ アンタなあ、ワタシおちよくりにきたんか？

ヒトミ ごめんごめん、そんなつもりはないんやけど、

アズミ どんなふうなウワサ聞いたん。もめごと起こして行方くらましたとか、

ヒトミ まあそんな感じ。

アズミ 何年も帰ってけえへんかったら死んだも同然やろ。

ヒトミ そやわな。

アズミ ほっといてくれたらええのに。

ヒトミ 人の口に戸は立てられへんわなあ。

アズミ もおっ、いやになるわ。

ヒトミ いやになるわなあ。

アズミ ナンタがゆうな。

ヒトミ ワタシもアレやで。

アズミ うん、

ヒトミ そやろ。

アズミ そやから勝手に仲間や思てうちにくるんやな。

ヒトミ あー、そうかもしれん。

アズミ 他人（ひと）の迷惑かえりみず。

ヒトミ、パチンパチンと腕や足元を叩いている。

ヒトミ ……慣れてくるもんかなあ、

アズミ ……、

ヒトミ 蚊アやおっ、もう蚊がいるっ、…ここは蚊アが多いな、…そらそやわな、

川の横やしな。竹藪やし。

アズミ そらしゃあない。

ヒトミ ほんで、ホタルはまだかいな？

アズミ まだや、

ヒトミ そう。

アズミ ……だんなさんから、連絡、とか、ないん？

ヒトミ ない。

アズミ 今晚、ええ天気やったのに会われへんかったんやなあ。おかしなあ。アンタ織姫やのに、

ヒトミ 織姫！

アズミ ワタシもや、タカダ織物の。

ヒトミ あははははは、……。今度くるときは虫よけスプレー持ってこなあかな。  
アズミ まだくるつもりなん。

ヒトミ ホタル見にくる、……。十日な、あした、あさって、しあさって、

アズミ ホンマにくると思てんの。

ヒトミ ホタル？

アズミ ちやうやる。

ヒトミ ……まあな、期待はしてへんけど、

アズミ まあ、

ヒトミ 帰ろかな。

アズミ そうしちよう。

ヒトミ これ（酒の四合瓶）置いていくしな。

アズミ またよけいなもん持ってきて。

ヒトミ せっかく持ってきたんやし。

アズミ もらういわれがない。

ヒトミ もう仲良しやし。

アズミ だれが？

ヒトミ ワタシら。

アズミ そうは思てへん。

ヒトミ ほな、お父さんに。お父さんに供えたって。アンタのお父さん、お酒好きやったんやろ？

アズミ やめて、そのハナシ。

ヒトミ あかんか？

アズミ アンタわかっててゆうてんのやろ？

ヒトミ なにを？

アズミ 酒乱や。酒癖の悪いクソジジイや。アイツに飲ましたらあかん。キチガイ水や。

ヒトミ まあ、なんかあるなとは思たけど、だれもはつきりゆわへんし、

アズミ キチガイや。

間。

アズミ そや、アンタ、ワタシのこと名前で呼んだやろ。

ヒトミ うん。

アズミ やめて。

ヒトミ みんなアズミちゃんて呼んでたで。

アズミ みんなて、そんな、みんななんておらへん。アンタとも、そう呼び合う間柄とちや

あうやろ？

ヒトミ もう、そうなってんのとちやあうん？ ワタシ、ヒトミ。ヒトミちゃんて呼んで。  
アズミ まいるわ。

ヒトミ ワタシら似てると思えへん。

アズミ 思えへん。

ヒトミ アンタのお父さんて、行方くらましたんか、家の中でかくれてんのか、

ボタンと、戸が閉められた。

少しの間。

扉越しに、

ヒトミ

よお知らんけど、アンタはお父ちゃんてワタシは主人やろ、そこはちやう。原因とか、理由とか、それもちやあうやろしよう知らん。そやけどワタシなあ、アンタにな、聞いてもらいたいなあ思て。ほんでな、良かったらアンタの話もな、聞かしてもらえたらなあて。アンタこの前な、ワタシになんか原因があるんとちやあうんか、思い当たることないんかてゆうたやろ。それも含めてな、聞いてもらいたいねん、なあ、またこさしてえや、なあて、……。お酒、持って帰るのもなんやし、ここに置いていくわ。よかったら呑んどいて。ほな、じゃましたな、帰るわ。

一瞬の間。

ヒトミ

なあ、居てへんようになつたひとつちゆうんは、いったいなにを思て、どんなふうにな、どこへ消えていってしもたんやろなあ。消えてしまったひとが、また帰ってくることであるのんやろか。

ヒトミ、懐中電灯の光とともに去る。

扉に向かって動かないアズミ。

車のドアの閉まる音。

小さな生き物の鳴き声が果てなく拡がる。

しばらくあって車のエンジン音。

生き物の声が沈み一瞬無音となり、

また甦る。

アズミ 夏に、帰ってくる。・・・ホタルになつて光りながら、ワタシのまわりを、飛びまわる。

音楽3。

溶暗。

(4)

音楽3、雨の音に呑み込まれて消えてゆく。  
明転。

七月十日。

雨傘をさしたヒトミ、川の傍に立っている。  
戸が開く。

アズミ きたん、

ヒトミ いてへんなあ。

アズミ あたりまえやろ。こんな雨の中、ホタルが飛ぶかいな。

ヒトミ 雨が降ってなかったらいたん？

アズミ いいや。

ヒトミ 十日やで。

アズミ 今年はまだ見いひんなあ。

ヒトミ 去年は今ごろ飛んだんやろ。

アズミ うん。

ヒトミ 今年はおそいんかなあ。

アズミ さあ、

ヒトミ 十日にはくるてゆうたんやろ、あのひと。

アズミ 十日ごろ、や。

ヒトミ くるわけないわな。

アズミ あきらめたん。

ヒトミ なんかなあ、きたらこわいわ、ワタシ、

アズミ え、

ヒトミ あのひと、きてたらどうしようて、こわかった。

アズミ なんて、

ヒトミ なんか、いろいろと、

アズミ いろいろ、

ヒトミ 消えてしもたニンゲンが、こんな山奥の真っ暗闇の川べりに、ホタルの青白い光に  
包まれて現れる、て、そんなんまるで、幽霊やわ。

アズミ 死んだんちゃあうんやから。

ヒトミ もう死んでるような気イする。

アズミ なにゆうん。なあ、ホンマについてへんかどうか、探してみてもええんやで。

ヒトミ 探すて、

アズミ うちのなか。  
ヒトミ 山姥の、  
アズミ もお、  
ヒトミ いや、ごめん。  
アズミ まあ入り。  
ヒトミ えーっ、うそー、入ってもええの。  
アズミ ええで。  
ヒトミ オダニの山奥の、秘境伝説が今、あきらかにされる、その時がきました。  
アズミ アンタいちいちうるさい。  
ヒトミ ドキドキするわあ。  
アズミ おおげさやなあ。

ヒトミ、中へ入った。  
見渡して、

ヒトミ キレイにしちやあるやん。  
アズミ まあな、整理整頓だけはな。  
ヒトミ 大掃除したんやろ？  
アズミ わかるけ？  
ヒトミ 今日から引越してきますすっちゅう感じやん。  
アズミ 物がなからや。  
ヒトミ がおか、おおきにアズミちゃん、  
アズミ アンタを家に入れるために掃除したっちゅうわけやないで。  
ヒトミ お酒やん、  
アズミ アンタが持ってきたやつやろ。  
ヒトミ 水ナス、それアンタが漬けたん。  
アズミ そこで採れたやつ。  
ヒトミ おおきにおおきに。  
アズミ なんでアンタがおおきにつちゅうのん。  
ヒトミ え、ちやあうん。  
アズミ あがるか？  
ヒトミ いや、ここ(三和土)でええ、ここでええ。  
アズミ 意外と謙虚なんやな。  
ヒトミ そやで。育ちがええねん。お嬢さまやからな。

と、上り框に腰を掛けた。

ヒトミ うちなんかもお、洗たくもんやなんやかや一回出したもん、そこいらじゅうにほつたらかしのままやわ。

アズミ さすがお嬢さま。

ヒトミ 広いなあ。

アズミ フスマはずして風通しをよおした。アンタとこみたいな大きい家ちやあうし、もうつき当りの向こうは外。

ヒトミ 別にうちかてそんな豪華な暮らしとちやあうよ。

アズミ 子ども医者で、ほんで、もひとりは留学さしちやあるて、

ヒトミ それは、まあそういうこともあった、ゆうことで、もう全部済んだ。終わった。あの子ら、もお帰ってけえへんねんやから。

アズミ そら、な、おとなになったらな、自立して、親から離れるもんやわな、

ヒトミ 嫌われてるねん。

アズミ え？

ヒトミ 会社継ぎたないて。

アズミ そらお医者さんに継がすわけにはゆかんなあ。

ヒトミ いずれにしても、ワタシらの業種はいつまで持ちこたえられるか、

アズミ フジタタオルはそんなことないやろ。

ヒトミ うちで働いてもうてるのん。パートさんばかりやで。

アズミ そんなわけないやろ。

ヒトミ ほとんど機械動いてないし。古株さんには、頼んで辞めてもらた。

アズミ そうやったん。

ヒトミ 粉飾決算って知ってる？

アズミ 一応、意味はわかるけど。えっ、そんなことゆうてええん？

ヒトミ 共済から銀行から、もうタイヘン。ぞっとするわ。そんなんやで、うちは。

アズミ そんなんか。

ヒトミ (声を押し殺すように笑い始める)。

アズミ . . . ぞしたん？

ヒトミ な、

アズミ なに、

ヒトミ ワタシら、仲ええやろ。

アズミ (苦笑い)。

ヒトミ ワタシにはわかってたんや。

わずかな、間。

アズミ お医者さんの息子さんに資金援助とか頼まれへんの？

ヒトミ そんなお金あるかいな、まだ若いんやし。

アズミ お医者さんやで。

ヒトミ 絶縁状態やし。

アズミ 絶縁で、親子やで、

ヒトミ そやから、・・・嫌われてしもてるねん。

アズミ 娘さんの方は？

ヒトミ こっちから縁切った。

アズミ なんでまた、

ヒトミ 子どもなんかなあ、一生懸命手エかけて育ててもな、ピアノやら塾やらなんたら教室やらで入れちゃって、旅行や遊園地やって、遊びに連れて行っちゃってやで、それはそれで楽しかった思い出、思い出や。ほんで、ほんでや、お兄ちゃんには、会社の金使いまわして医学部にやって、私立（わたくしりつ）のやで、どんだけ金かかると思てん、で、下の子は女の子や、英語が得意やからグローバルなんちゃら勉強したいゆうて、どないしても、ゆうもんやから、アメリカに留学さしちやって、ほしたらなんと、結局向こうで相手見つけて結婚して、外国人になってもおた。ちようどおんなじ頃や、景気が傾きだして、ほんでワタシら夫婦は田舎の、姥捨て山みたいな工場（こうば）に残されて、それやのに、それやのにまた、今度は主人が・・・、

アズミ 山姥のつぎは姥捨て山か、

ヒトミ 山姥はアンタやで。

アズミ まあ、呑みえ。

ヒトミ ビール買うてくるんやったなあ。ワタシはビールが好き。

アズミ もお、わがままなんやから。ほなこれ、ありがたくいただきます。

ヒトミ おお、やって、て、もう呑んでるやん。ワタシもここにくるまでうちでビール呑んでたけどな。

アズミ 飲酒運転やん。

ヒトミ 平気平気。

アズミ（飲んでから）アンタ、

ヒトミ 慣れてるから。

アズミ いや、

ヒトミ なに？

アズミ（躊躇しながらも）ご主人のこと、聞かしてえな。

ヒトミ どないしたん。

アズミ そのう、家ではどんな・・・、

ヒトミ どんなもこんなも、うちでは、そうやなあ、暗いうつとうしいひどややで。

アズミ . . .、

ヒトミ 借金あるやろ、火の車で、返せる道理もないのに工場動かさなあかんし。徐々に徐々に首絞められていって、真綿で首絞められるっっちゃうな、工場停めたら死ぬウ、みたいな。そらしんどかったやろな。

アズミ ほなフジタタオル、これからどうするん。

ヒトミ さあな、どうしようかな。

アズミ 人生を楽しんでるふうやった。

ヒトミ え、

アズミ だんなさん、ワタシと会ったとき。

ヒトミ そんなふうに見えたん。気イのちっちゃいひとやけどな。

アズミ 落ち着いてて、誠実そうで、

ヒトミ ふふ、ええかっこしいやさかいな。家から外に出たらそんなことおくびにもださへんわな。

アズミ 大人の風格を漂わして、

ヒトミ ちよっとアンタ、うちの主人に惚れたんか。

アズミ なんでやねん。

ヒトミ て、なんでアカなんねん。

アズミ アカなってないよ。

ヒトミ それみてみいな、不倫したっっちゃうわけや。

アズミ もおええよ。ほんでな、それでいて童心に帰る純真さがあって、

ヒトミ なにそれ、

アズミ サカナ、網で追いかけて、ホタルのハナシしてくれて、

ヒトミ ふうん。アンタ、オトコを知らんな。

アズミ、酒を苦そうに呑んだ。

ヒトミ お父さんも、そんなふうに呑んでたん？

アズミ え、いや、知らん . . .、

ヒトミ ワタシはな、うちではな、キリキリ女。

アズミ キリキリ女？ それなに、

ヒトミ 妖怪。

アズミ ああ、とうとうついに正体を現したか。

ヒトミ そっ、妖怪キリキリ女。いっつもキリキリしてん。

アズミ キリキリってなんやねん。

ヒトミ キリキリ怒ってん。キリキリってな。キリキリした顔、って想像つけへん？

アズミ つくわ。



ヒトミ 思たらなあ、ずっと子どもらにな、キリキリ怒ってばかりやったんやなあ。かわいそうなことしたわ、ホンマ。長男がな、小学生の時や、お母さんの似顔絵を学校で描かされてな、そこで描いたのが妖怪キリキリ女。目エ吊り上がってな。ガックリしたな。ワタシいつもこんな顔してるんか思い知らされて。反省した。反省したけど、おそろしいもんやな、やっぱキリキリ女はキリキリ女や。子どもらが家からいてへんようになってしまったらな、今度はな、うちには主人とワタシだけやろ。キリキリ女の餌食になるのは主人ただひとりや。それが辛うていてへんようになっただんかなあ思うねん。キリキリ女からの逃亡。捜索願みたいなのも出したれへん方が、あのひとのためや思うんよ。

アズミ ふうん、

ヒトミ もお帰ってけえへんわ。孤独な老後や。アンタもそうやろ。

アズミ ほっといてほしい。

ヒトミ どう思う？

アズミ いや、反省してるんやろ？

ヒトミ 違うて、ワタシ、怒りっぱいやろ。キリキリしてるやろ。

アズミ まんじゅうさげて怒鳴り込んできたしな、丑三つ時に。あれはやっぱ妖怪キリキリ女やったんや。

ヒトミ 逢魔が時や、黄昏時。

アズミ ああ、

ヒトミ 丑三つ時やったら、

アズミ もっと怖い。

ヒトミ 草木も眠る丑三つ時、幽霊がでます。

アズミ 藁人形に五寸釘を打つ。

ヒトミ 丑の刻参りでおます。アンタ藁人形に釘打ったことあるやろ。

アズミ ないない、

極わずかな間。

ヒトミ (突然、悲鳴のように) ほんで逃げていったんやわあ、

と、泣き出した。

しばらくの間があって、

ヒトミ ワタシのこと情緒不安定とか思てるやろ。

アズミ 否定はせん。

ヒトミ 自分の腕を引つ掻いている。くりかえして。  
自身の身体に違和感を感じてどうしようもない、というふうでもある。

ヒトミ (苦痛とも快感とも何とも例えようのない嗚咽) ああ、

アズミ 好きやったんやろ？

ヒトミ え？

アズミ だんなさんや。

ヒトミ オトコマエやし。

アズミ 社長やし。

ヒトミ ちっさい工場やけどな。

アズミ 結婚したんやもんな。

ヒトミ 婿養子。

アズミ マスオさんかあ。

ヒトミ アンタ、アズミちゃん、なんでずっと独身をとおしてるん。

アズミ さあな。

ヒトミ ええひととか、いてへんかったん？

アズミ いてへんよ。

ヒトミ 言い寄ってくる男とか、

アズミ いるかいな。

ヒトミ 男嫌いや、とかゆうてた？

アズミ ふふ、・・・

ヒトミ なに含み笑いしてん、・・・やらし、

アズミ なんでやらしいねん。

ヒトミ はは、(唐突に) ひとりはええわあ。

アズミ そんなことゆう？

ヒトミ うちでも工場でも、一日中「緒やったらな、もお息苦しいて、キリキリしてしまう。

主人の笑い声聞こえてきただけでキーン、って、なるんやで。

アズミ 不思議そうにゆわんといて。

ヒトミ いや、不思議なんや。なんでやるな。お茶をすすする音ズズズって聞こえてきただけでキリキリーッって。ときどきな、あつ、ちゆうねん。クセ。あつ、ちゆう間のぬけた声。あつ、て、あれなに思いついたんやろな。その間のぬけた声聞かされたらもう、むかむかして、腹立って腹立って、キリキリーッってなって、

アズミ キリキリ女の登場や、こわいこわい。

ヒトミ それからダジャレ。しょうもないダジャレ、

アズミ、しょうもないからダジャレやねんて。

ヒトミ しょうもあつたらなんてゆうん。

アズミ、あ、

ヒトミ 空気読まん、後先考えんと、ポロっとゆうねん。周りを困らすだけ。

アズミ ダジャレぐらいゆわしたつても、

ヒトミ 死んだらええねん・・・、

アズミ え？

ヒトミ この甲斐性なしが、なにワタシの前で偉そうにふんぞり返ってんねん。資金繰りもようつけられへんのに。先行きどないなる思てんねん。ほんで、ゆうてしもた。死んだらええねん、て。主人に面と向かって、ぼそっと、ゆうてしもた。ポカンとしてた。意味わからへんかったみたい。

アズミ いやわかるやろ。怖いわあキリキリ女。辛いなあキリキリ女。

ヒトミ そう思てくれるん。

アズミ ふたりとも辛いわあ。

ヒトミ 後悔してるねん。なんでそんなこと口から出てしもたんやろ。不思議やなあ。好きなんやで主人のこと、今でも、きつと。よお考えたらな、やっぱり大事なひとなんや。いてへんようになったらワタシが淋しいねん。それやのになんで、あんなこと、して、しもたんやるか・・・。

アズミ ヒトミちゃん、

ヒトミ ……なに？

アズミ 歳いくつ？

ヒトミ 五十三。

アズミ ワタシより四つお姉さんやわ。

ヒトミ 四十九？

アズミ お互いにこっつい歳やな。

雨音が立ち上がってくる。

ヒトミ 雨激しいな。

アズミ そやな。

アズミ そのうち息子さんらも里帰りくらいするて。

ヒトミ 手紙もよこさへん。

アズミ 娘さんのほうかて、外国人の婿さんと、

ヒトミ やめて、こられたら困るわ。

アズミ ご主人のこと、息子さんらにはまだ知らしてへんの？

ヒトミ ええよ。

アズミ なんで？

ヒトミ あの子らには関係ないさかい。

どうしようもない間。

雨音。

アズミ ホタルな、

ヒトミ うん、

アズミ だんなさんから聞いたんやけどな、

ヒトミ うん、

アズミ あのホタルの光るのんはな、オスがメスを求める、求愛の光なんやて。

ヒトミ そう。

アズミ あれっ、知ってた？

ヒトミ 知ってた。

アズミ 知ってたか。そやけどワタシにはな、この世から消えていってしもうたひとのな、なんかもっとおそろしい、どろどろした、この世への執着みたいなものに思えるんですよ。

ヒトミ 光るのんが、

アズミ 生きること、命を燃やすこと、

ヒトミ ホタル燃えてんのか。

アズミ ちやあうよ。

ヒトミ 燃えてる。オレ燃えてるんや。今夜オマエが欲しい、みたいな。

アズミ おぞましい。

ヒトミ ひとだまやあるまいし。

雨音。

ヒトミ なんや、寒うなってきた。燃えてないわ。

アズミ 低い土地やし、川の横やし、

ヒトミ セメントの生乾きのおいやな。

アズミ 大掃除のついでにな、風呂場の方もな、この雨で乾きそこねた。

ヒトミ 川、溢れてるんとちやあうん。

アズミ まだ大丈夫。

ヒトミ ほんまに？

アズミ 音でわかる。

雨音小さく。

ヒトミ 小降りになってきた。  
アズミ うん。  
ヒトミ 帰るわ。

と、立ち上がった。

ヒトミ アズミちゃん、今日はありがとう。  
アズミ ヒトミちゃん。飲酒運転や。  
ヒトミ そやで。気をつけてや。  
アズミ なんでワタシが？  
ヒトミ 轢かれんように気をつけて。  
アズミ なんじゃそら。  
ヒトミ ほな、

ヒトミ、戸を開けた。

飛び盛るホタルの群れを見た！

ヒトミ あっ！あーっ・・・  
アズミ どないしたっ、  
ヒトミ ホタル。  
アズミ (怯えたように) ええっ！

一瞬の緊張した空間。

ヒトミ ちこた。なんやあ、雨が光ってるんや。  
アズミ ……  
ヒトミ ほな、アズミちゃん、また、  
アズミ あ、うん・・・、  
ヒトミ どないした。  
アズミ いや、  
ヒトミ そう。

と、にっこり微笑んだ。

アズミにはヒトミの笑みが、真実すべてを自分は知っている、といっているように思えた。

アズミ、怯える気持ちを隠し平然を装い、

アズミ うん、また遊びにきて。  
ヒトミ うん。

ヒトミ、傘をさし、出て行った。  
アズミ、戸を開めた。  
雨音はカット・アウトされる。  
無音。

アズミ クソジジイ、びっくりさすな、はよ成仏しくされ。

川面を叩く雨音。  
川の流れが激しい。  
溶暗。

(5)

セミの鳴き声が聞こえ始めると明転。  
一カ月以上が経った。  
真夏、旧盆のころ。  
昼下がり。  
日差し。  
ヒトミ、やってきた。

ヒトミ アズミちゃん、  
アズミ ああ、どうぞ、  
ヒトミ いややわ、クーラーもついてへんのやし。  
アズミ 川の横は涼しいねん。  
ヒトミ とうとうホタル飛ばんまま盆がきてしまうな。  
アズミ 川にな、カワニナがいいひんかったんや。  
ヒトミ やめて。  
アズミ て、ダジャレちゃあうで。  
ヒトミ 釜ヶ崎行ってな、探してみいてゆうてくれるひとおる。  
アズミ だんなさんを、  
ヒトミ そやけどどこ行っても一緒やわ。日本中どこ行ってもみつかれへんもんはみつかれへん。なあ、  
アズミ そうかなあ、

ヒトミ アンタお盆休みか？

アズミ 今日から。

ヒトミ うちも今日からや。どっか行く予定は？

アズミ どっかて、

ヒトミ 旅行や。

アズミ ワタシはどっこも行けへんで。

ヒトミ せっかくの休みやのに、

アズミ ヒトミちゃんは海外旅行とか。

ヒトミ うーん、

アズミ なに考えてるん。

ヒトミ 一緒に行けへん？

アズミ えーっ、海外旅行。

ヒトミ ちゃうがな。別に海外やのうてええねん。

アズミ 旅行に行ったらお金かかるやろ。そもそもワタシは、別に行きたいとこてないしなあ。

ヒトミ ほなワタシもやめとこかな。

アズミ 行ってきたらええやん。

ヒトミ アンタ見習わな。

アズミ 見習うて、

ヒトミ アンタみたいに床下にセメントの金庫つくって、ごっそり貯め込むようにならな。

アズミ アンタそれを狙ってワタシに近づいたやろ、て、ちゃうちゃう、そんなもんあるかいな。タカダ織物勤めてて、なんでそんな金溜まる？

ヒトミ 経営のキビシサを知らんか。

アズミ 身分が違います。

ヒトミ 七年待ったら葬式もできるし、保険金も受け取れるんやて。しかし七年は長いな。

アズミ 帰ってけえへん決めつけてるわ。

ヒトミ 帰ってけえへんで。(平然と) ワタシが殺した。

アズミ、凍りついた。

緊張の空間。

ヒトミ みたいなもん。

一瞬の間。

アズミ びっくりした。

間。

アズミ ……ヒトシさん、二回きた、ここに、  
ヒトミ えっ？

アズミ ヒトミちゃんが怒鳴り込んでくる前。

ヒトミ ああ、そらそやわな。そやなかつたら幽霊や。

アズミ ワタシ、……待ってた。またここにきてくれるの、待ってた。

ヒトミ アンタ、……

アズミ ヒトシさんのこと、好きやったような氣イする。

ヒトミ あっそう。

アズミ ごめんな。

ヒトミ いいや、ありがとう。

アズミ え、

ヒトミ 浮気したてゆうてもらわんと、不倫したてゆうてもらわんと、それやないとワタシ  
困るねん。

少しの間。

ヒトミ アズミちゃん、浴衣もってるか？

アズミ 浴衣？

ヒトミ ええねんええねん、うちにアズミちゃんに似合うのきつとあるわ。な、そやから盆  
踊り一緒に行こ。

アズミ 盆踊りに、

ヒトミ キレイにして、ええカッコして行くんよ。

アズミ いや、ワタシは、

ヒトミ お盆やもん、あの世に行つてもたひとも帰ってくるわ。うちの主人とも会えるで。

アズミ ホンマに殺してしもてるわ。

ヒトミ そやからワタシとこのムラにもおいでよ。オクボは大勢集まるよ。オダニよりずつ  
と都会やからな。二重三重のおっきい輪になって踊るよ。なあ、三日間でツダじゅ  
うの盆踊り全部まわってみよか。

アズミ それ旅行の代わりか？

ヒトミ 世界一周や。

アズミ どんな世界や。

ヒトミ アンタ化粧しい。したことはないやろ？ちゃんとお化粧したら見違えるほどキレイ  
になれるから。



アズミ 四十九やで、  
ヒトミ ターゲットは四十から上やがな。  
アズミ ターゲット、  
ヒトミ 待ってやんと行くんや。ふたりともキレイにして町じゅうの男をからかいに行こ。  
アズミ ワタシそんな、  
ヒトミ アンタのお父ちゃんもくるわ。  
アズミ イヤやて。  
ヒトミ うちの主人もくるわ。  
アズミ そら、うれしな。  
ヒトミ 白装束でな。  
アズミ 白装束？  
ヒトミ ほんでワタシらも白装束でな。  
アズミ 仮装大会は最後の晩だけで。  
ヒトミ オバケ大会や。幽霊のかつこ。ここ(おでこ)に三角のんつけて、  
アズミ 本気でゆうてんのかいな。  
ヒトミ 顔、おしろいで真っ白にして、  
アズミ びっくりするわ。  
ヒトミ だれが？  
アズミ 盆踊りの櫓に集まるみんながや。  
ヒトミ 櫓の周りは、それはもうよおけの求愛の光だらけやで。  
アズミ あれもホタルか。  
ヒトミ みんな光っとる。  
アズミ 提灯や。  
ヒトミ ホタル。  
アズミ てかてかや。  
ヒトミ 燃えてるんや。  
アズミ お星さんから見おろしたら、ワタシらみんな、ホタルみたいなもんやろな。  
ヒトミ 光るんや。  
アズミ 光るんか。  
ヒトミ アズミちゃん、ヤル気になってきたか。白塗り白装束で、ほんでアンタ、ばっちりメイクして、  
アズミ ふふ、  
ヒトミ 初めてやな、  
アズミ 白塗りな、  
ヒトミ ワタシの車に乗んの。  
アズミ えっ？

ヒトミ 行こか。

ヒトミ、歩き始めた。

アズミ 車で？どこ行くん？ちょっと待って、

と、あわてて家の戸締りをする。

ヒトミ 買いに行こ。幽霊になる道具一式。それと、アズミちゃんに、ちゃんとした化粧品と、

アズミ 化粧品くらい持ってるて。

ヒトミ いっそのこと、芝居の白塗りするやっや。

アズミ え、美白やのうて、

ふたり、笑顔である。

音楽 4。

坂を上がり、里道へと向かうふたり。

車のドアの閉まる音、そしてエンジン音。

エンジン音が高まると、歪なノイズ音響がかぶさり、音楽 4 を覆い消してしまう。それが最高潮でカット・アウトされると、残響音を残し、舞台はいったん暗黒となる。

一瞬の無音。

無音の時間を経てやっこのドラマは終止符を打つことになる。

音楽 5、フェード・インする。  
了。

作者記す

※この戯曲はふたりの女優のために書きました。ふたりはアズミとヒトミという、真実を語っているのかいないのか、判然としないようにみえる役柄を演じるわけですが、つまりは、アズミもヒトミも、劇中では互いの前では女優なのです。ふたりが語る台詞のどこまでが真実かは常に疑ってかかるべきです。

※音楽や効果音、照明効果に関する記述は、作者の演出プランによるものです。

上演記録

①遊劇体ピアンドエー公演

2018年6月22日から24日

京都・東山青少年活動センター

出演 大熊ねこ（ツチダアズミ）

こやまあい（フジタヒトミ）

演出 キタモトマサヤ

舞台監督 キタモトマサヤ

照明 久保田智美

音響 キタモトマサヤ

②遊劇体ピアンドエー公演

2019年6月15日から16日

東京・梅ヶ丘BOX

出演 大熊ねこ（ツチダアズミ）

こやまあい（フジタヒトミ）

演出 キタモトマサヤ

舞台監督 沢渡健太郎（劇団第一主義）

照明 西岡奈美

音響 奥村朋代